



露宿
第9号
r o j u k u k u
号

定価500円

表紙写真	中谷 美穂	
文中写真	岡田 知子	
路上の騎手	富士森 和行	2
ゆうぐれ他	鈴木 克彦	3
エロスの廃園	望月 大成	7
山谷とホームレス	浮草	9
ウグイス	五林 修	11
詩四編「花火」ほか	土屋 太	13
「ろじゅく」への希望	矢田 道夫	14
陽だまり17	秋戸 空	15
詩二編「怨らめしい」他	田仁多 憲治	16
ショートショート	AS・デービット	17
松島遊覧	弓削 鴻介	18
俳句など	古川 昭一	
入院日記2	KTさん	19
ポイステ戦争	瘡師 辰雄	
望郷宇治	風来坊	20
川柳など	小一	
旅立ち	只野 酔払	21
全国でお酒をやめる会	新城 秋男	22
最近思う事	アル中の宮	23
年と共に生きる	宗春	
無題	名無しの権平の方々	24
無題	角本 輝幸	25
無題	Eさん他	26
湊町より	高橋 美香	27
東京路上ふらり散歩	笠井 和明	28
	岡田 知子	
ぼくわたしらはみんな生きている	恩田 美代子	35
支援者に告ぐに反論	田中	36
編集部への手紙	渋谷区在住Kさん	
Kさん、田中さんへ	恩田 美代子	
はり師いが丸の肝心かなめ	はり師いが丸	37
編集後記		38

路上の騎手 十六首 富士森和行

前衛の旗手の叫びが教会の棚よりわれの胸に跳込む

(王子北教会礼拝の折)

わが余生に尚必見の書のありて当今キレる少年ら想ふ

沛然と降る夜の雨に流れるマタイの受難曲秋黙しつ、

熱き血を燃やし挺身せる頃の純潔こそ、前衛の歌

底辺の迷へる魂方舟に救われざらむ神との否距離

(創世記、ノアの方舟に想ふ)

ふと遮る福島泰樹歌集あり老いに鞭打つ秋めく月夜

わが窓の草花にさえ蟲は来て鳴く夜うらはらに心晴れゆく

新しき世紀へ生き継ぎ失へるものに眼覚めよイエスの担い手

抱えたる聖書の跡がわが腕にしばらくは愛の証たもてり

(救世軍、祈禱会司会給わる)

さりげなく席譲る娘の瞳の涼し残暑の街をバスに揺られつ

宵闇にたかき下枝のそよぎつ、白き槐の塊る晩夏

烏川悠然として迫り来る両毛三山の秋にた、ずむ

(救世軍関東聯隊、高崎礼拝の折)

頑なに齒咬みせる程健在に老いの齒ばかり憎きものかな

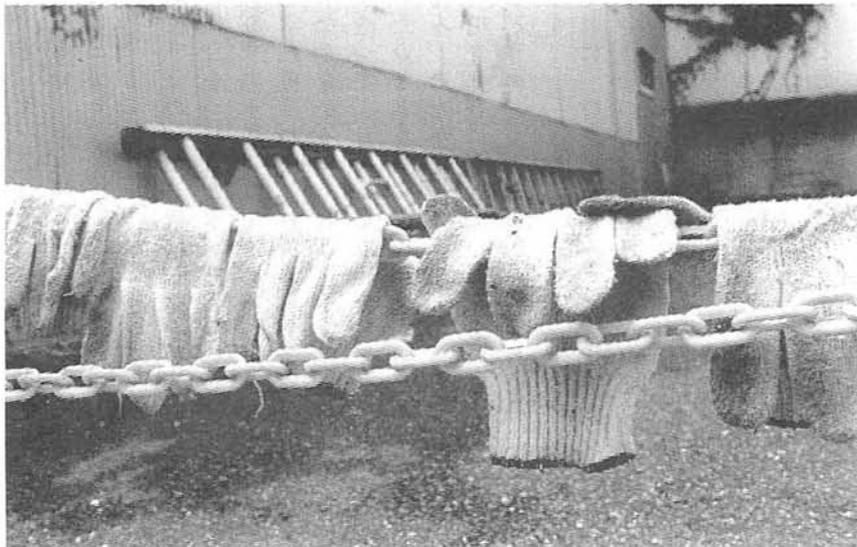
神よりの恵みの証黒葡萄秋灯の下孤独の聖餐式

単なるプロレタリアに甘んじてうしなふ勿れ路上の騎手ら

噴り続く海あり伊豆の名は夙になつかし故もなくして

(火山地災続く伊豆七島に想ふ)

二十世紀―九月三日、詠



鈴木克彦作品集

太陽の宮殿

より

夕暮れ

けさ夢を見た。飛び散った鏡の破片に映るさまさまの映像の如き夢。

何んでも、目の前に黒い河があって、ボクはそれに向わなくてはならないようになっていた。風が吹いて、ボクの前を、シルクハットを飛ばされた紳士達がそれを追って走る

もの凄い勢いで走る列車の床下、車輪の近くにぶら下がって逃げる二人の囚人。わめきながら叫びながら、早い車輪の回転の中に力尽き、ひとりは車輪に巻き込まれ、ひとりは鉄橋の下へと落ちてゆく――

親しい友達が近づいてる。だがボクを罵倒して去る。「死ぬ！多くの者を墮落させ、家族を傷つけ、やがてやつらに殺される前に！」（俺はただ華の値段を聞いてこい、と言われて来ただけなんだ！）と叫ぶが声は出ない。

女がやって来る。「とても生活が苦しいから、産んだばかりの子を畑にうめた」と言う。（俺は何もしていない！相手を間違えているんだ！）ヤクザがやって来る。「絶縁されたよ。あれだけ働かされ、金を貢いだあげく――（そうだ！俺も追われるんだ、官権とヤクザの両方から！）

ボクは、自分が何者かに呼ばれているような気がしている。呼ぶのはドス黒い河で、河の向う岸には死の府があるようだった。だから、母

の所に行つて、「ボクは行かなくてはならない」と語つた。母は驚いて、「どこに行くの、こんな時間に――」と心配そうに聞き、「今、行かなくても――」と、言つたようだったが、前後がはつきりとしれない。あとは訳の分からない宵闇の中に、やたらと空しい感情が残る、いやな夢だった。

別にけさの夢と一致はしないが、いつの頃からか、目をつむると水が見えるのだ。川の水でもあり、湖水のようでもある。静かな水、静かな死水だろうか。これが路地や階段、地下宮殿の水なら分かる。それは、子宮回帰の願望みたいなやつで、目に見える親分の黒い圧力から逃がれたいと願うからに違いないのだから。失恋の痛み、七十年安保の敗北。虚無的厭世的な心情が、現実社会に生きていたくないという顕われだと思ふのだが――水の幻想もそれに似たものだろうか。

それに、時々、血まみれの赤子を見る。全身に赤い血管の走つた、目もあかぬ胎児の二重三重の姿。自分には何んの関係もないと思うのに――これも、闇におびえ、力、勇気が出ず、無為に生きる辛さが水を見せるのだろうか。一体、水とは何んなのだ。天国の中央を流れる生命の水でないことは確かだが、天国とは地獄のことかも知れない――

昼と夜の間には夕暮れがある。

きのうのことだと思ふ。ひよっとするとおとといのことかも知れない。スワマンブール寺の裏道を歩いていると、山の斜面にボツンと建つ小さな家があり、家の戸口の圍りに七・八人の小供らが口々に言しながら、何かを指さして騒いでいた。みんな一様に目を丸くして、真剣な目つきだった。ボクも彼らが指さしている方を見たが、何を見て何を騒いでいるのやら皆自分から知らない。そこには何も見出しなかつたから——きつと、小供だけにしか見えぬ何ものかがあつたに違いない。そんなふうにしてホテルに戻つたが気にかかる。このソワソワとしていたたまれない気持は、夕暮れが迫つて、大気が黄色味を帯びたせいに違いないが、小供の頃からそうだった。夕闇の心に誘われて、どこかに行きたいと、いつもそう思つていた。何かが自分を呼んでいるような気がしてならなかつた。

その時、ふいに、どうした訳か、プンクンドへ行こう!と意味もなくひらめいた。なぜそう思つたのだろうか、まるで分からない。プンクンド。チベットとインド国境あたりにあるという秘境。涅槃の地と呼ばれている所——風もなく、大気も動かない一面の湿地帯。そこには、見渡す限り、大きな蓮華が生えているとい

う——悪感が走つた。寒い。見ると体中に鳥肌が立っている。そう。沼に巨大な青く、肉の厚い蓮の葉がビッシリと生え、その間を縁青の茎がニユルニユルと伸び、大輪の蓮の花を、つぼみを上方に咲かせている、鬱蒼とした光景、動かない青紫の水——夕暮れの迫るホテルの窓辺に、大して気にも止めていなくなつた、その地名も意識の中に消えてしまつていたようなプンクンド。緑、青、紫などさまさまの蓮の群生が大きく、ガ——と現われ出たのだ——

そうだ。昔、こんな話を母から聞かせてもらったことがあつた。ある小供が「夕飯を早く食べさせてくれ」と、しきりにその母にせがんだ。母は、「どうして」と聞くが、「行かなくてはならないから」としか答えない。何度聞いても小供は行き先も、目的も語らず、夕食を終えると夕闇の中に駆けて行つた。が、戻つては来なかつた。翌朝、小供は近くの川に死体となつて浮いていた。

たそがれは、昼と夜の間に、しのんでやつてくる。そして語りかける——

夕暮れ
夕ぐれはただならぬものを秘めている
目には見えぬが聴えるもの

たそがれの奇妙な風に乗つてくる形なく人の心を狂わす匂いを運び夕ぐれ時にのみ生きて消えるもの

たそがれは姿を見せぬ御使いの徒机のそばにも忍びよりそおつと囁いて輝いて そおつと去つて行く
反照の甘く透きとおることばと共にこつちへおいでよお——と誘う声で

日没の瞬間はただならぬ焦りと不安ワナワナと心かきむしる悔恨と寂寥矢のように去つた日々への追憶
心の薄汚ない部屋に灯がともり
母の待つ懐しい家に近づき帰る時

夕闇は限りなくかつたるい時
きまつてやつてくる無為倦怠の流れ
何が嫌で何がしたいか恋しいか
大声で叫び 走り出したくなる時
淫蕩女が見事な姿態を見せ始める頃

行こう 夕ぐれの叫ぶ彼の方へ
歩き出そう 誘う声の方へ
吠え始める森へ 狂い出す荒地へと
長いこと己を呼んでくれた主の所へ
総てを捨て 身ひとつで走つて行こう

(完)

お母さんボクは行きませす

(太陽の宮殿より その三)

一、川に出る

川に出る 川に出る 小暗き小川
崖を下って夕闇の小川に出る
ジョワジョワ ザワザワ流れる
岩だらけ石だらけの小川に出る
小川は俺を呼んだのだ
俺は小川を求めてやって来た
不思議な縁に誘われて谷の岩場に下りて来た
水の流ればさまさまに
分裂した己の気持を集中させ沈め
陶酔させ我を忘れさす
ジャワラジャワラ岩をぬって走る水
大岩小岩の小川にそびえる高い崖
その上に被いかぶさる黒い木々
星々がさめざめと泣く天蓋の下に
うごき騒ぐ背の高い雑草
あの草々が怪しいんだ 雑草が狂わすのだ
風の音に高く低く蛇のよう魚のように
動く草木の語る奇怪なウソ物語
風に和して動く淫靡なストーリー
早い流れを目で追ってゆくと
あつという間に岩から岩へ
ひらりひらりと流れにぶつかっては砕け
いずこかの闇の中にのまれてゆく

闇が水を呑むのか 水が吸い込まれるのか
夜の川は姿を変え音を代え
色を替え衣を変え
昼の優しい音じゃない輝き光る水じゃない
黒々と寒々とドクドクとギスギスと
残忍なる音をたててわめき去る
草も木も風も岩もが姿を変えて
生きづいてる
きつと何かが集まって支配しているのだ
水辺に魔女達が集うのもこのためだ
水は魔性のもに変わるのだ
そんな小川に誘われてフラリとやって来た
これは何かの定めに違いない
きつとすべての要因が
ひとつひとつ合わさってつながって
こうなるようにできていたのだ
ずつと前から決まっていたことだ
ヤクザに使われ 旅に来て
金をなくして友に裏切られて
ひとり異国をさまよって
己の分身やカマの飛び交う夜に脅え
得体知れぬ夕暮れの語らいに誘われて
この川へと来るようになってたのだ
バシヤバシヤ笑いさざめく小川の流れが
こうした自分を呼んでいたんだ
やがて黒い夜が来るやがて寒い夜が訪れる

訳も分からず野山をさまよって、水の音に
おびき寄せられて、平地のさけ目の谷に下り
て来て、今、その流れの中に身を入りたい、
投じたいと思うのは、恐怖への回帰願望か狂
気のせいかな。

が、何んと静かな気持だろう。大小の岩の
谷を黒く流れる夜の水は、深く気持を沈めて
しまう。重く沈めてしまう。

そうだ。

V字形の岩間をぬって走り流れるこの川
は、向うの滝へと続いている。いつか見に行
ったことがある。高い滝から水が地に落ちて、
途方もない長い年月に、岩盤をえぐり、巨大
な深い、大きな地下の穴へと落ちるのだ。岩
るるの曲りくねった洞窟に、ゴーゴーガ
ーガ―水は落ちてゆく。水煙りはたち込め、
凄まじい音―

しかもこの水は、地底を数キロ走って、ず
つと向うの、崖のふもとの一方をつき破り別
の滝となって、両断崖の中を流れて大きな川
に合流してるのだ。

二、お母さんボクは行きませす

寒き夜は長く 追われしふるえる魂は
つかもうとしてるのだが 許されぬ
闇の中を 転生の中を幾度巡っても
許されぬ霊達よ

そんなのが集まり来るところ
いつの日か

いつの日にか許されることもあるだろう

だが今は そのための一段階

暗き闇の中に入らねばならぬのだ

闇の中に苦しみぬいて

痛めつけられつづけて いつの日か

別のところへも行けようが

今の自分にはこれしかない

なぜって そのように仕組まれた生涯だもの

犯した罪の重さと深さは

苦しめられて消すしかない

最大の友が別れて行ったのも

安保の時の乱闘や 女との別れ

逆に右翼・男気にあこがれたのも

ここに来たことも みなきょうの

今のためのことだったんだ

暗き夜の中に我を沈めよう

闇の中に身を隠してしまおう

ここにも 隠れている数多くの悲しい目が

そうすることによってしか救われない人々が

たくさん見えるじゃないか

暗き流れはブシユルブシユルと

一面に濃い夜の霧が立ちこめて

ブジュリグジュリと水は行く

寒き大気の中に

木々のざわめき風のわめきに送られて
水だけが去って行く

水に流れてこのボクも闇の闇へ逃がりたい

お母さんボクは行きます

なぜだか分かりませんが行きたいのです

川に流れる水になってしまいたいのです

水になって流れて行きたいのです

お母さん 行かなくてはならないのです

そういう声を聴いたので

これは前から決まっていたことなのです

夜の小川の黒々とした流れの中に

同化してしまいたいのです

淋しくも悲しくもありません

不思議に何んの未練もありません

行きたいだけ

どこもここもみな同じです

どんな人も概ね同じです

どれもこれも同じだから

そんな所から人から逃がりたいのです

そんな所にも生きたとしても

何んの意味も感じられませんが

欲望やら生きている意味なんて

少しも価値あるものではありません

いやそんなことよりも

水がボクを呼んでくれるのです

水になりきってしまうことが

昔からのボクの願いでした
この汚ないボクの心と体

水にいつしか流されて

大海原にまでも行ってしまいたい

こんないやな肉体なんて

岩角や木々の枝に傷つけられて

引き裂かれて流されて

人に見られずちぎり切られて

魚のエサにでもなれば良い

激しく岩をぬって行く流れの中へ

入り込むのがうれしいのです

ガチンゴチンと鋭い岩にぶつかって

この頭と体が痛めつけられるほど

ボクの罪亡しになるのです

何んの役にも立たなかったボクだから

せめて水の神に我が身を捧げます

さようなら お母さん

親不孝ばかりを重ね つづけて

でも悲しくも切なくもありません

むしろすごく静かな気持です

夜の大气と水の誘いに吸い込まれ

星のまたたく冬の空の下

闇の川霧のひとつぶになってしまおうのが
そんなボクをお許しく下さい

(完)

「エロスの廢園」

より 望月大成

八、ドラキユラノ子

僕、ドラキユラノ子デス

体ガモヤシデ ナヨ、シテハイテモ

僕ニハ強イイ味方ガイマス ソウ オ母サンデ

ス

オ母サン 僕ンチノ一番強イ人

イツモ僕ノソバニイテ

御飯作ッテ オ洗濯シテ 時ニハオ遊ビモシテ

クレテ

僕ヲ可愛ガツテクレル 大切ナオ母サン

僕ガコウシテ強イノハ

ミンナ 優シイ母サンガツイテルカラ

学校カラ帰ルト 真先ニトンデイクノハ母サン

ノオソバ

母サンノオ膝デダッコ

大キナオッパイ ナデ、シマス

暖カクッテ オイシイミルクノイッパイツマッ

タ

柔カイ 母サンノオッパイ

僕ダケノ 大切ナ大切ナ宝モノデス

僕ノ趣味ハスポートデス

デモ ボールヲ投ゲタリ 奪イッコシタリ

アンナノ 赤ン坊ノオ遊ビデス

スポートツハカノ世界

強ク正シイ者ダケガ生キ残ル 正義ノ力

正義トハ 人ニ勝ル力

ウルトラマンノヨウニ 強クナルノガ僕ノ夢

僕ハソレヲ 毎日ヤッテイマス

街ニハ悪イ奴ガイマス

橋ノ下ヤ 公園ノ繁ミ 天文台ノ中

街ヲ汚スダニ ゴキブリ 奴等ヲ退治スルタメ

ウルトラ部ニ所属シテイマス

ソウ 僕 ウルトラマンナンデス

ウルトラノ星ナンデス

モヤシダカラッテバカニハナリマセン

ナヨ、シイ一本ノワラ

デモ タクサン寄セ集メテナウト 強イ縄ニ

ナリマス

一人デハモヤシデモ

十本寄レバ 強イ綱デス

怖イモノナンカ 何モアリマセン

真夜中ニ僕タチ出カケマス

ホームレスノテント小屋ヲ壊シ、食料ヲブチマ

ケ

火ヲツケテ燃ヤシ 金目ノ戦利品

イタダイテ帰リマス

手当り次第 メチャメチャニタ、キ壊シマス

右往左往シテ逃ゲ惑ウ乞食

オ腹ノ皮ガヨジレマス

街ノ高台ニアル 鉄道学園跡ノ森

繁ミノ影ニ乞食ガ二人 テント屋デ暮シテイマ

ス

ミナデタ、キ壊シ 追イ出シマス

思ッタマケデ 腕ガムズ、

奴等方向ッテキタラ

タ、キノメシテ 足腰立タナクシマス

死ンダッテイ、ンデス

僕タチノ大先輩 乞食ヲ一人タ、ッ殺シマシタ

サツノオジサン 何モトガメズ

アイツハ 豚ダカラ

君タチ知ランブリデ黙ッテロ

サツニ任セナサイ 刑事サンソウ言イマシタ

ダカラ 僕 安心デス

心配スルコト ホント何モアリマセン

僕 母サン 大好キデス

コノ世デ一番大好キナ 大切ナオ母サン

オ勉強ガデキナクテモ

女ノ子ニモテナクテモ 運動会デビリニナッテモ

ソナハ僕ヲ優シク慰メテクレル

心強イ オ母サン

母サンサエ居レバ 他ニ何モイリマセン

悲シイ事 悔シイ事 腹タツ事 イッパイアリマ

ス

デモ 母サンノチューーッデ

ミンナ サツバリ消エテナクナリマス

母サンノオ尻 ナデ、

母サンノオ股ノ奥ニアル 真黒ナ繁ミノオ部屋デ

オ休ミサセテ貰ウ時

僕 スッキリ生キ返リマス

オ母サン 行ッテ参リマス

乞食タチニ 正義ノウルトラマンノ強サ

タツブリ見セテヤリマス

帰ッテキタラ 母サントオネンネ

母サンノ奥ノオ部屋デ オ休ミサセテチヨウダイ

ネ

楽シイ夢 見サセテ下サイネ

母サンニハ 何ノオ土産モナイケレド

無事ニ帰ッテキタラ
コノ僕 オ土産ダト思ッテ
サア 行ッテキマス ガンバッテキマス
僕ハウルトラマンノ戦士デス
万歳 僕ノオ母サン

(一九九六・九・二十二 山谷にて)

九、母サン、ピストル買ッテ

―ドラキュラッ子 続編

母サン 僕ニピストル買ッテ
ア、僕 悔シインダ
コンナバカナ事ッテ 本当ニアル?
僕 学園へ行キマシタ 仲間タチ十人イマシタ
真夜中デス 真暗闇デシタ
僕 片候ニナッテ 小屋見ニ行キマシタ
見張番ノ乞食ガイマス
僕 近クヘ寄ッテ 見テヤリマシタ ドンナ野
郎カッテ
マズハ様子 拝マシテモラッテ
ソノ後 総攻撃
乞食ノ奴メ 入口ニ立ッテマス
多分 僕等ガ怖クテ ブルゞ震エテル
僕 ソウ思ッテマシタ
ア、ソノ時ノ僕ノ驚キ
乞食ト思ッタノハ 絵描キデシタ
絵描キガ何デコンナトコニ? ウケハ知ンナイ
山下清? 乞食画家?
デモ 紳士ノカッコシテ 乞食ナンカジャナイ
僕 ドウシヨウカト様子窺イマシタ
一声 合図シタラ
仲間十人 タチマチ殿リ込ミ

僕 スツカリ迷ッチャイマシタ ヤルカ ヤメ
トクカ

ソノ時デス ベレー帽ノオジサン
僕見テニヤリト笑イマシタ
僕 仰天シマシタ 絵描キノオジサンノ右手
ピストルガ僕ヲニランデイマス

僕 逃ゲマシタ

仲間ニイ、マシタ ヤバイ アレ乞食ジャナイ
イ、カラヤロウ タ、ンジマエッテ
仲間タチ 言イマシタ

ソナナヤバイコトヤンノ嫌ダッテ 僕
サッサト帰ッチャイマシタ

僕ノホントノ胸ノ内 ピストルガ怖カッタんで
ス

一発ズドン 僕 アノ世行き
大好キナ母サントオ別レ

ソナノ嫌 嫌

イツマデモ 母サンノ子デイタイ
母サントオ遊ビシテイタイ

母サン 僕ノ涙ヲフキ取ッテ
僕ノ手ヲシツカリトオッパイニ当テガイ
言ッテクレマシタ

今夜ノコト 誰ニモ言ッチャイケマセン
学園へ行クノモオ止シナサイ

悔シイノハ分リマス
才命ト 学校ノ方ガモット大事

明日 授業ガ終ッたら 真直ニオ家ヘオ帰リナ
サイ

母サンガオ股デ可愛ガッテ
坊ヤノ胸ノ内 スツキリサセテアゲマス

母サン シツカト僕ヲ抱キ
僕ノホッペト額ニ

優シクチュウシテクレマシタ

(一九九六・九・二十四 山谷にて)

十七、い、加減に泥を吐け

―多摩墓地浮浪者殺人事件

さるホームレスの詩から

よう、い、加減に吐いちまいなよ
おれがやりましたって

気がすーっと楽になってよう
お前だって こう毎日、締めあげられたんじや
たまったもんじやねえだろよ
おれたちだって 同じ

まる一日 朝から晩までお前さんにつき合っ
てちや
まったく 身がもたねえよな
ちよつとはさ おれたちの身にもなっ
てくれよ

だってさ お巡りだっ
て人の子
たまには 赤提灯
でいっぺえやり
たいし

時にはカ―ちゃん
とも 早くお楽
しみやりてえと
思うよな

お互いに 楽しもう
じやねえか
お前がさ やった
とひと言いっ
てくれりや

万事 めでたし め
でたし
お前も 楽になっ
てさ

たゞ飯食って 寝
てられんだぜ

そりや 分らんこ
ともねえよ

お前の言いたいこ
と
おれはやっちゃい
ねえって 分っ
てんのは

街の悪餓鬼達
サツじや そんな
ことすべて御承
知

けんどもよ 前途
ある若者をよ
たか、肺病やみの
急げ者のブー
タロばらしたか
らって

少年院へぶち込
んだんじや
可哀そうって
もん そう思
わねえかな?

親が学校が泣こ
うってもん
そこでよ お前
が身代りって
わけさ

仏野郎と同じのお前もブータロー 誰も疑やしねえ

お前がうんとひといいや 万事すい、
こういうわけなんだよ

悪い取引じゃねえと思うがな

ようくさ 考えてみろ

毎日 屋根つきの家で寝てられてよ

たゞで飯が食えて テレビだって見られんだぜ

それに引きかえ 今のお前は

スーパリーの残飯 あちゃこちやかき集めて

墓地暮しをして 仏様の上前をはね

夜は墓石の隣で野宿

そんな暮し続けても つまんねえだろ

そりゃ 酒もない 煙草もない ちよい辛いところ

あんけど

雨が降っても 雪が降っても

ムシヨは平気の平佐

何だつてよ 悪餓鬼に追っかけられ

石ころぶつつけられて 右往左往する思いをす

りゃよ

ムシヨは天国そのもの

病氣もなつても 医者とはたゞでな

お前さんがんこよな もう一週間

おれたちもい、加減 疲れたよ 殺生よなお前

つて

天どんの一ぱいくらい おごるからよ

やりましたとひといい、なよ

ま 八年も入ってくりゃい、んだから

屋根つき 飯つき 寝ぐらつき そんない、と

こねえぜ

てんかん持ちのお前 どうせ
どこ行つたつて 雇うところなんざあんめえ

ムシヨに入れば失業もなし

人助けにもなる

お前の決断で 餓鬼が五人助かんだぜ

な お前さん 仏になんなよ

い、ことやつとけば 次のムシヨ入りの時には

い、よう計らつてもやるぜ

だからさ 思い切つてひといいうんだよ

おれがやりましたつて

(一九九五・六・二十 上九村にて)

山谷とホームレス

・ 雑感

浮草

私が初めてここ、山谷^{ヤマ}に来てから早くも三年近い。山谷に来る人々、ここで生活の基盤を築く人たち。きちんと仕事を持ち、簡易宿舎ながら一般社会人と何ら変わらない生活を営んでいる人たち。

一方で、私のように仕事もなく、一切の生活保護、福祉の保証もない、文字通りのホームレスにとつて、山谷のような所はなくてはならない場所である。ここを起点に、ホームレスにとつては近隣のボランティア団体のお世話に授かる訳だ。

山谷には様々な人がいる。同じホームレスにも傲岸不逞、どこまでも身勝手な奴。長い野宿生活での疲弊が赤く濁った目、懐

疑的な目付に変えてしまったのだろうか。
それでも、なにかの拍子に目礼・会釈などを交わした際、一瞬ポツと、恥じらいを帯びた笑顔を見せる時がある。

山で出会った人たち。

Aさんー。Aさんとは八月の末、ちよつとしたきつかけで知り合った。還暦近いAさんは、私の現在の悩み事につれ、あれこれ指図し、福祉の事でも直接福祉センターに赴き、取り計らおうとして下さった。

だが、私のような個人主義者(悪く言えばエゴイスト)にとつて、他人が自分の内面まで入り込むことを許さない。Aさんは、ほんとうに悪いと思いがながらも、丁重

にお断りした。しかし敬虔なクリスチャンでもあるAさんの純粋な心遣いは、ほんとうに嬉しかった。

Bさん。Bさんの場合もフトしたことからお付合がはじまった。Bさんは山谷を中心にボランティア活動をしておられるが、たまたま日曜日、福祉センター前で炊き出しに参加してみないか、と誘われたのである。私は一瞬ためらったが、私にでも出来ることならやってみようと思ひ承知したのである。

炊き出しの準備は午後一時頃から始まる。先ずセルロイドのたらいで米を研ぎ、その米を洗った巨大な釜に移す。傍で野菜、(ニンジン・カボチャ・タマネギ・ピーマン・長ネギ)等、ありつたけのものを包丁できざみこれも釜に入れ、さらにリーダー格の人が一握りほどの塩をふって、水道の蛇口からホースで水を足し、水加減を測る。これで、ほぼ下ごしらえは終り、あとは釜をドラム缶でできたカマドの火にかけるのみ。一ダース余りの釜とカマドが横に整然と並んだ様はなかなか壮観である。

私は初めのうち、自分は何を手伝っているのやら解らず、しばらくボケッと見学をさせてもらったのだがカマドの火入れのとき、ちょっとした発見があった。薪はパレットをバラした角材が主だが、やみくもに角材を入れても火は起きない。角材と角材の間に空間をつくらなければならぬ。角材と角材が重なり合ったままだと、その間

に空気が通らないので角材はほとんど燃えない。ヘタをすれば勢い火を止めかねない。三十度を越える厳しい残暑の中、火を焚くのだから汗がドツと吹き出る。ボランティアの人達の半数近くが自分と同じくホームレス仲間であることに、なんとなく心安らぐものがあった。

炊き上がった御飯を白いポリの容器に盛り、参列者に配り、一通りの仕事を終え、それから後片付けの後、ボランティア団体の事務所(というより、小さなホール)でボランティア仲間全員の食事が始まった。先ほど炊いた御飯の上に、アンかけ風野菜炒め、言ってみれば中華丼のようなもの、それにソーメンの汁がけ、かけソーメンとも言おうか。

久しぶりに体を動かし汗をかいたせい、料理はほんとうにうまかった。私は二度おかわりをしてしまった。

日も暮れて、帰りがけにBさんにビールをごちそうになって別れたが、心地よい疲労感と清々しい気分がいつまでも残った。

Cさん。Cさんは、ホームレスではなく職安で仕事を斡旋してもらい、いわゆる日雇労働者である。俳句をたしなみ、同人誌にも投稿し、俳号も持つ。Cさんとはある人を介して知り合ったのだが、私より四つほど年下で、四十半ばである。理知的なマスキに風体はここ山谷では見かけないタイプである。Cさんの作品は主に(労働)を詠ったものが多いが、もちろん写生句もあ

る。Cさんに勧められて私も句を詠んでみたのだが、所詮凡人の付け焼刃、左の句がそれである。当然Cさんの添削が入る

年明けて晴着の乙女香水の匂ふ

ホームレス自嘲の酒梅の下

梅冷えの夢は破れて場末酒

炊き出しに情けなくとも寒くとも

炊き出しに待ちくたびれて寒くとも

花は蕃愛でるともなく酒かかえ

隅田川桜きらきら春うらら

隅田川行き交う舟に花も舞う

ホームレスが普通の人々の生活の枠組の中からはずれて、言わばドロップアウトして行く過程には様々な事情がある。だが私は、自分がドロップアウトしてしまったことを、社会の所為、他人の所為にはしたくない。虚勢を張る訳でもなく、正義漢振るつもりもない。冷静に考えてみれば、それはやはり、自分自身の内面の弱さにあったのだと、しみじみ思うのである。

浮草のように自からの舵をもたず、ながされるままに浮世を徘徊、浮浪しつつ、しかし―しかし、いつか必ず人並の生活を、人生の基盤を築いていこうと密かに自分に誓うのは、恐らく、全てのホームレス仲間、の気持も同じではないだろうか。

秋雨に心も濡れて露宿かな

ウグイス

五林 修

散歩でゆるい坂道を登りすこし先まで行くと小さな池がある。餌のパンを鯉になげていると、ホーホケツキョ、艶のあるウグイスの声である。

「ウグイスは、一年中鳴きます。」近所の人がかう言った。
こんな信じられない話しを聞いて、私は、耳も少し悪くなったのかと思った。

どう考えても、おかしい。
姿も見せず鳴くウグイスに気を引かれていく自分がおかしい。でも一年中鳴くとは季節感に狂いが生じたか突然異変でも発生したのか、よく解らない。

生活は呑気が一番、その次にこの呑気を生かし何かを不思議がったり面白がったりして、仕事はあまりせずつらふら歩いて、

遊ぶ。

これが理想であるがまず実現しない。だから申し訳程度に働きはする。といって今風のあの夢中になって働くなんて事は、しない。ほんのわずかな自由を、路上で最大限に生かして生きる。この人達の逞しさは、働きに夢中になってまわりが迷惑がる人達のそれに、数倍して余りある。その上には上があって、街路、上で日光浴をして日を暮らしている自分が、羨ましいと思うのが、あのウグイスである。

ウグイスは、なぜ姿を隠して鳴くのか？
鯉に餌も与えた。帰る。

それでも、また考えた。泣いている」と、人は言った。さえずる」とは言わなかった。さえずってもらった方が良いのだ。
坂道を下りる途中で、山の方を振り返った。

ホーホケツキョケエキョ。
ウグイスが何か意味ありげに、また泣いた。

乱暴に路上を飛び交ふカラスの群れは別として、小鳥にはどこか優美さとはかなさがある。人は言う。
人様のために作ったのかカラスのために

つくったのかまったく訳が解らなくなる都市には、人とカラスが、めいっばい群れている。

繁華街や公園に群れをなすカラスは、都界の一つの風影となっている。
公園のもう一つの風影となっているのが、あの目にしみる鮮やかな青テント群である。ここでも面白い事を見た。動物を飼うことは嫌いなのだと言いながらも、カラスをベツトとして飼っている人が上野公園にいた。

羽根は飛ばないように少しすぼめてある。ゲンの悪さを感じたのは最初だけで、なれるとかわいものらしい。確かに上野の森のカラス群は、新宿方面の群れと覇を争うほど強力だと言う。

またなぜテントの中で人とカラスが共生関係を成り立たせたのか？
よく解らない！

ウグイスには、さえずりから生まれる明るさがある。泣きわめく暗い闇の使者のような黒いカラスにそれはない。
はかない都界が笑っている。

それはそれ、人間様の嫌われ者同士なかなか暮らす。まったくテント村では何が起るかわからない。
これもよく解らない！

「不吉な鳥が夜騒ぐと火事が出る。」その根拠は不明でも、なぜか人を引き込む。説明できないところに良さがある。

けれども上野の森のカラスは権現様の化身でないし、ヤタノカラスの道案内に至っては真赤な嘘である。

よく解らないところから伝承伝説が生まれる時代はよかった。極めつけは神話の崩壊で見事に信じる者は裏切られた。

これをよく知る路上は、現実だけで充分である。

空が黒ずむほど、めいっぱいのカラスが生きる。

なり果てたふしだらな東京の方が、カラス以上に不吉なんだ。

テント村も上野だけでなく、都下全域に拡大を見せる。泣くのはカラスの勝手か

「ホーホケキョ」か、慎太郎！頭、丸めめ！（文句あんなら、いらっしやい路上に！）

夢を現実にした方、現実を夢にした方、暑い夏たき火でもしてもっと熱く燃え、燃え尽きてしまう方、全ての人に無条件で御勧め出来る一冊の本、とえば、

ボン

Ⅹ

山本周五郎の「ウグイス」に決定！だよな。本を読むという非文化的活動を一気に爆破してしまう一冊といえは

ボン

Ⅺ

主人公とか脇役とか端役とかいうカテゴリーも一気に破壊してしまう一冊といえは

ボン

Ⅻ

「ああ、そうか、俺だ」とうなずく。

混沌とした世相に反発し、絶望を感じる。でもなく何か善いことが明日に待っているような。予感。

何も食わず水だけのので地下道で寝る。

コンクリートの空洞、地下道で寝るすべを失った人の群れ。上野の杜のテント群。

頭の中、まっしろ。

見方、感じ方、表現の仕方…。当り前、人によって異なり、異なっていた方が望ましい。これ前提の前提である。条件は：ない。つまり無条件

で、問題は何んだっけ。

答えはあるようでないよう

つまり アレだ。

アレッテ、アレカ

ソウダ。

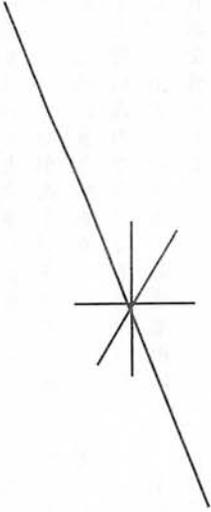
何に、夏はソーダを飲めってヤレヤレ。



photo by 橋本弘道

花火

花火が、あがる：
きれいだ：
しかし：
ちってしまう：
人間の命がそうであれば：
一瞬でも輝き：
そして：
ちってゆく：
ホームレスはどうだろうか、かがやく
時はあるのだろうか：
不安をかかえながら：
ちってゆく：
そんなのはいやだ：
人間、皆、花火のように、一瞬の輝き
があればいい一つでもいい、人間に生ま
れたからには一瞬の輝きがほしい：
そうするうちにまた花火があがった。



明日

泣くのはよそう：
明日はくるから：
そして：
愛がないなんて言わないで：
どこかで君を見ているから：
どこかできっと……。

壁

生きている毎日、一日が壁だと、
そう思うそれを一日、乗り越えた
時、僕は安心して床につける、時
には苦しい時だってある、時には
悲しい時だって、でもそれを乗り
越えなければ意味が無い。うれし
い時だってそう：壁なんだ、生き
ている事は、一つ一つが乗り越え
ていかなければ、ならないんだろ
う、だから：だから：不安になる
んだろう：何んだっていいんだ：
一日の壁があつたらそれを乗り越
えなければ：生きてる意味が無い
ような気がして……。

電車

電車のホームを降りる時：
君に出会った
何年ぶりだろう：
お互い：
声もかけずに：
時が止まったかのように：
恋した時の思い出：
お互いふざけたり：
笑ったり：
泣いたり：
時には愛を語り合ったり：
ただ、お互いだまって見つめ合っていた：
そして：
君は目をそらして：
ホームに先に降りた……：
僕も後から追うように降りた：
しかし：
追わなかった：
そしてお互い：
別々の方向へ歩きだした：
そして僕は思った：
「僕は君に：
まだ：
さよならを言っていないよ。」
と。



「自画像」

何人だか…月に露路宿に自分の詩ののると…うれしいです。以前は感動したと言われた時にまだ、まだ詩を書き続けて行くこと思いました。良い作品を作る事を心がけますので今後とよろしくお願ひします。

土屋 大

「ろじゅく」への希望 矢田道夫

先輩や友との人間交渉の中で、自分の生き方をたしかめ、高めるという役割に、同人雑誌の第一の存在理由を見る。思想と感情が形象として相互表現され、それが友情によって相互批判され、生活の中で生き方として実践されて行く同人雑誌の役割は他の比でない。(要約)…と児童文学作家奈街三郎が書いている。「ろじゅく」を手にしてページをめくると、まっ先にこの言葉を思い出したので記してみたが、「ろじゅく」も、正に「思想と感情が形象として相互表現され、友情によって相互批判され、生活の中で生き方として実践されて行く役割」を担っているものだと感じた。

私も山谷に定住(?)してから六年になるがかつて所属した同人雑誌的なグループで知り合った知人との交友が、最も長くかつ貴重であったことを実感するようにもなった。その交友の中には、出版社草思社の初代社長となった長塚貞徳(故人)もいて、二十年ぶりに会った私と、ガンの手術で声帯をなくした彼は筆談で二時間ほど往時をしのぶ話をしてくれ、その数日後他界した。これも、かつて互いに作品で互いの思想感情を知っていたことから生じた行動と考えざるを得ない。思想・感情が作品として相互表現され、友情として実践されて行く一例として記してよいと思われる。

「ろじゅく」8号で言えば20から23ページにある四編の表現は、まだ会ったこともない人なのに一種の友情を感じさせるし、35ページから37ページは行動への指針を見る思いがする。これから始まる「ろじゅく」を通じての交友に希望を抱いている。

(ぬくい米)

どこからでも詩のタネは
拾ってこれるのだけれども…

ぬくもりのあるお米

毎週、炊き出しのある

山谷城北センター前で

充分にある米でわななければ

その米を使って

炊き出し、飯を造る

雑炊でしかないけれど

米はお米だ！

野菜もいろいろ入っている

皆の気持もたくさん入っていて

仲間、たちに食べてもらう

一人一人の食べる人たちの気持は

分らないけれど…

やはり皆は待っている

あつい陽が照っている下で

汗をかきながら待っている

造る人たちは汗まみれになって

野菜を刻ざみ

どなり合いながらも米の中に入れて

雑炊を造る、だから造る人たちも

汗だくだ！

米のぬくもりの話

頭の内をかすめていった…

少女 「お米、ぬくいわ…」

少年 「米、冷たいよ…」

少女 「あたい、お米こんなにあると手

入れているもあたいにはぬくく感

じる…」

少年 「ボクには冷たいけどな…」

少女 「あたいにはこんなにあるお米に手

を入れていると、ぬくいしとって

もしあわせ…」

少年 「…ふうん」

米びつに入ったお米

毎日充分に食べられるお米

ぬくもりのお米

炊き出し、を食べに来ていた人たちは

そのでき上がりを待っている

「米の飯はうまい」！

一人のおっちゃんがそう言った

ぬくもりのあるお米…

仲間、を想う人たちは

いつもそれを願っているだろう

毎週来られない私は

その話を想いながら

考えた…

この地でお米が

充分あったなら…

ぬくい米って、なに…と

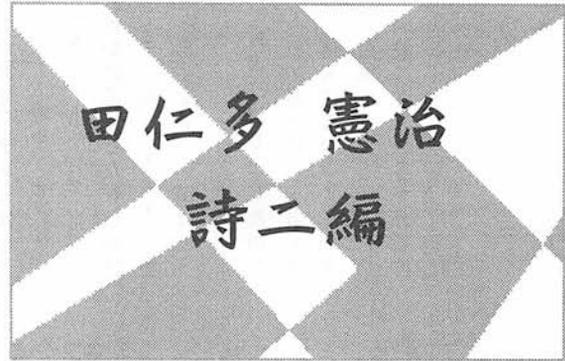
陽だまり 17

2000
・ 8
・ 26

秋戸空

怨らめしい

俺はいつも思う！
俺の母は被差別部落民だ
俺の父は大日本帝国陸軍中将だ
親父とお袋の血をひいている
顔はお袋似 頭は親父似だ
お袋は戦前45年5月頃から
久留米の被差別部落中にまかれた
ピラを他人からよんで聞かされ
愛国者だから
そのピラには「愛国婦人を求む」と
書いてあり「部落」中の
愛国者だった15才から75才までの
婦人が志願した
そしてついたのが
松本ろうという
女郎屋だった
「お前達明日から
客をとってもらうよ」と
おかみさんから云われ
思わず2人が井戸に
飛びこんだという
お袋は18才だった
「客をとれ」という意味が
理解できず「客をとった」らしい



客に 軍人ですから素っばだかに
むかれた時の恐怖を
理解できませす
乙女の心にわいたのは
もう戦争はイヤだと
いう思いだけでした
戦争になったら
特攻に行く者たちの
オモチヤになるしかないのです
だから怨めしいのです

怨む

母は戦争（大東亜戦争）当時
従軍「イアン婦」だった
その息子は部落に住んでいた事で
小1〜小6まで
同級生から軽べつされ「バカ」にされ
中1〜中3まで学校で首席
成城学園高校で入学金免ジヨ
（当時50万円位だった）
授業料免ジヨの特タイ生になると
クラブのオーナーと同せいしているにも
かわらず「私の息子 私の息子」と
云って泣き出した
その涙のわけは
怨めしいと一言だけだった
俺は怨む
帝国主義と帝国主義者だけは
許さないという心だ
あと差別の元凶
|| 天皇だけは絶対
ボタンコへ送り込む事だ（ボタンコ || 「死刑台」）

S・Fブラック、ユーモア、ショート、ショート

眠られぬ秋の夜の為に!!
コレを読めば、貴方もスグ眠れる!

A・S・デービッド (作)

愛人に逃亡された貴方はセックス・レスは別として、何故か不眠症になり悩んで居た。ある秋の夜、フト立ち寄った書店でベスト・セラの表記の題名の文庫本(¥六六六)〈税込み笑〉を買い帰宅し愛人の居ないダブルベッドに身を投げ出しその本を読もうとするや否や突然、睡魔に襲われ気を失った。フト気が付くと何やら様子が：感じがムードが：おかしい。大型の目覚し時計を見る。針は有るが時間表示の数字は完全消失。

時計の側のカレンダーの文字も数字も同様、テレビはどうか? スウィッチ：オン。チャンネルを——廻す。音声は。映像も。○は○なのだが放映中の如きワイリーリング——。夢か現実か? 発狂したか? はた又誰かに薬を打たれたか? 手や頬や尻つべたを掴ってみる。痛い、痛い、夢とも幻覚とも違う。しかし現実とも：思えない。新聞はどうか?

昨日の夕刊らしきモノを捜し出した事は捜し出したのだが、何と新聞は只の大型の新聞大の数枚の紙だけに变身して居た。文字、写真、絵、等々——全く、何も彼もないナイナイ尽し——の只ののっぺらぼうの数枚の白紙だけ。とすると? 鏡は? 隣室の愛人専用だった全身三面鏡に貴方の姿を映して見る。鏡は現に在るのだが部屋の状況も貴方の姿も、何も彼も写ってはいない。

「透明人間に变身した? と云うのか?」
鏡は「黙して」語らず奇妙に光り輝きニヤ、笑って居るだけである。

文字数字、音声、映像、写真、絵画等の消失!! 完全自殺否、字殺完全音声消殺。映像写真絵画等々の皆殺!! とすると、発声しても歌っても無音、手を叩いても無音。目は見えても文字数字映像写真絵画等々は、小型ブラック・ホールに喰い殺されて居る。

「あらあら」(音声無音)。成る程、完全無音。完全字殺映像写真絵画等々の皆殺なら眠くなる訳だ。退屈で欠伸が出て：眠くならぬ方が異常? と云う訳か!!

理屈はそうなのだが現在の状態に貴方は頭を抱え発狂寸前になる——。発狂防止策はと——。

ウン、唸りながら歌の中の記憶の倉庫から聖書の中の次の様な語句を引っ張り出した。

「——始めに語葉——ありき!!」

現在の貴方は聖書とは異質な世界：「——語葉の無い世界」に居る!!

「聖書以前」の造物主の存在しない異界に、貴方はテレポート(時間移動)して居たのだ。

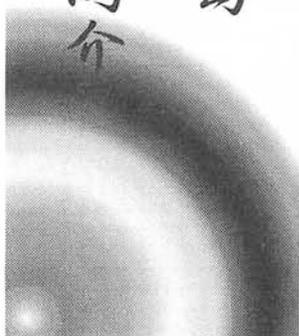
その事を自己確認するや否や貴方自身も部屋も鏡も何も彼も消失：絶滅し、貴方自身は、何と!! 「コレを読めばあなたもすぐ(瞬時)眠れる!!」と云う題名の、あなたと云う文字の裏面に貼り付いて存在する紙魚(シミ)の様な超小型の：得体の知れぬ：正体不明の無色無臭透明な知的意識体に——化身して居た。

こう云う超小型の一mm程の透明人間? に全人類が進化? 退化? したならば、殺せ!! 無差別に——原罪を犯した——すべての人類を殺せ!! 等々と云う幻聴!! 天の声? (笑) が聞こえて来て最も最高? と思って殺す気にならぬし、イジメやイジメラレルと云う事も皆無になる(笑)。その様に現代文明世相批評しながら貴方自身は「人間存在以前」から生き続けて居る人間の背後の無限黒幕軍団の魔族の仲間の人：正体不明の——「シャドウ・マン」にズボズボ、と進化してゆくのだった。

(完) 二〇〇〇年九月七日大安

遊覧松島

弓削鴻介



松島よいとこ、一度はおいで、
八百八島を、間い行く船の、
今日も汽笛が、鳴り響く、
松尾芭蕉が、呟いた、

日本三景、ここにあり、
松島や、ああ松島や、松島や、
汐のかおりが、プンと来る、
風に浮かれて、天真爛漫。

松島よいとこ、歴史の古跡、
遊覧船から、鎮守が見える、
あれが名代の、瑞願寺、
人は素朴に、義に熱く、
古い昔が、見える町

松島や、ああ松島や、松島や、
汐のかおりが、プンと来る、
風に浮かれて、天真爛漫。



松島よいとこ、宝の山で、
お肴旨いよ、お酒も美味、
戻り鰹が、また美味、
仲に見えるは、金華山、

鹿とお猿の、天国だ、
松島や、ああ松島や、松島や、
汐のかおりが、プンと来る、
風に浮かれて、天真爛漫。

はやしことば
*驚き、桃の木、山椒の木、

俳句など 古川 昭一

さやさやとすすきが揺れるそよ風に

紅色の夕陽が沈む日本海

はらはらと落ち葉散る散る人恋いし

眠りにつけず

ハツと我にかえり

思い出す

娘は幾つ、孫幾つ

入院日記パート2

K・Tさん

前回も書いた日記よりわ病気がよくなったことわないですが、目がかすむようになって手足のしびれるようになって来ました。いま書いているときでも目が二重に見える。とても書きづらくてたまらな

い。
入院していても手のいたみや足のしびれで夜もねむれない日が多くなってきました。入院時は三週間くらいとのことでしたが、ガッペイショウが出て来たとのことなです。書いてある時もなんとなくボーとしたかんじで書いていますのでよみづらいと思いますがゆるして下さい。
でわ、秋もがんばっていきますので
みなさまによろしく

大りんの

アサガオの花

みだれさき

入院の

友とはなすも

つらいかお

夏の日に

セミのなきごえ

のどかだな

屋上で

花火の音に

よいしれる

病院の

ベットのうえで

うたたねお

たやみに

まつりばやし

きこえるね

カミナリの

おとにおどろき

まどしめる

ポイステ戦争パート2

瘡師辰雄

昨年10月始めやつとベンチスイガラ入れをおく。これで終りかと思つた。ベンチ三ツくらいでは座れるワケがない。私がうるさいので近よらない。こんどは生命ビルの前に坐りこむ。となりのオクサンガイヤガル。アキカン食べ物の袋は捨てる。私は高見のケンブツ。と思いきや私が仕事にいけない日、植木の中、二階の通路でポイステ捨ていろゝあつた。本年四月新入生入る。又一からやりなおし同じことをくりかえす。これでは仕事にならない、イタチごっこ。考えた。おこつていては血圧が上がつてしまふ。スイガラガオチテイルト拾わず呼び出す。若い職員がヒロイにくる。イクラ注意しても三日ボウズ。次、女子職員を呼び出す。女はオコルワケにいかない。一緒にタバコをヒロイダス。女にアマイネ。三か月ぐらいつづ。次は事務長と話す。私と同じハゲ頭。先生やつていただけに腰がヒクイが古ダヌキ。タヌキにもタバコを拾わせる。七月に入つてから地下の通路にベンチ、スイガラ入れをオクガ、ガキドモはオトナシクしてない。こんどは学校の屋上でスイダス。私のマンション火のツイタママ捨てる。私に見つかりにげる。頭にきたので学校にノリコム。ドナリツケル。福祉の学校なので都庁、区役所電話するぞとオドカス。

八月の一日、ガキドモ夏休みチョットサビシイ。タイクツナノデ女子職員をからかう。美人二人ヨメサンがっかり。でも血圧がアガラナイノでタスカル。アメ、をモツテイク、私も戦争夏休み。十八日学校の植木センターしていたので少しテツダウ。事務所職員私のことをビビッテイルトキイタ。

九月に入つてから戦争始めるつもり。アメとムチ使いわけアマリやると会社、マンションオーナーにメイワク。少しオトナシクスルヨ?

◆ 望郷宇治 風来坊 ◆

（兔追いしかの山 小鮒釣りしかの川）

誰もが幼い頃小学校で習ひ覚えた童謡歌集の一つ、ふるさとの歌である。この歌を口づさむ時、ましてや秋のきざしが近づくにつれ私はふるさとの風景を思い出す。新幹線で京都駅まで行くもよし京都駅から四十分位で宇治に着く。私は新宿駅西口から十時三十分発の高速夜行バスで宇治行きに何年か前に帰省した事がある。バスを降りると目の前が京阪宇治駅、その横に宇治丘陵のたたずまいと、朝日山を望む清く流れる宇治川、川に架橋された宇治橋は、私が小学生の頃、暴風に流されて渡し船で川向うにある学校に通学した頃がかすかに脳裏をかきめぐる。其の後改修され現在の橋になり、橋の中央の張り出し部分は、三ノ間と云ひ、その昔、豊臣秀吉がお茶の湯の水を汲み上げた場所として今もその面影が残されている伝説がある。川下の鉄橋の上を奈良線の電車がどことなく名茶の香りを漂よはせ乍ら渡ってゆくと共に、名物茶団子の匂をは橋を渡り歩く人々の身に甘さの味を思い出させてくれる。平安時代からその自然の美しさは今でも愛され親しまれた宇治茶店が軒並に居をかまえる前を通り過ぎると藤原頼道が別荘をゆづりうけ寺として建立された国宝平等院鳳凰堂が聳え立つ。みんなが常時使用している十円硬貨の表面のデザインは平等院鳳凰堂なのだ。その故か私は十円玉をお守りとして所持している。平等院前の桜並木の堤の下を流れ

る宇治川、其の川の中央にある塔の先に魚を供養した日本最大の十三里石塔があり源平合戦の時、木曾義仲追討の宇治川先陣の碑があり、紫式部による宇治十帖も残されている。底冷え冬だが春は宇治川べりの桜並木の美しさ、夏は鶴岡と花火、秋は朝日山の紅葉と観光客には絶見の名所である。毎年六月五日の祟祭りが開催される。祟祭りは夜更けから朝方まで行はれる。奇祭に俗に人は暗闇祭とも云はれ、この間むかしは浴道の灯は消し祭を見ようと集まった男女の性の開放になり「結婚運の無い恵まれていない女性は、この祭を見にゆけ」とまで云われた。梵天そのものが男性のシンボルで儀式自体はセックスを神聖化したものと云われている。現在は縁結びの神社として崇められているさうだ。でも今は明方までの行事は止め、夜半には終るさうだ。私同様地元の方には残念だと云う。

ふるさと、もう一度帰りたいと願う。たとえ家族が無くても、ふるさとの匂ひが私を待っている。自分自身もう一度橋の上に佇みたい。まだまだ書き綴り度いが原稿の都合もあり、又の機会に我がふるさとを投稿させて頂ければ幸いです。辛い時、孤独に耐えられない時など、ふるさと、家族を思い出せば、良い考えも思案も浮かび人生の道が開けてくると信じつつ、筆を置きます。

ふるさとは 今も変らぬ 秋日和
紅葉 ひと枝 折りし思ひ出

川柳など

小一

ふつか酔 鼻おつまんで
むかる酒

一人酒 かくれて飲む
そのうまさ

意見され ちどり足かよ
見舞客

大相撲 三社祭りか
水 入りか

秋さんま 潮のかをりお
のせてくる

流れ雲 うつすすがたの
水たまり

百合わ咲いても かへらぬ人を
恋うて ひと目の山下り

山男 春風うけて むねに
情さけの花が咲く 百合の花
いくら咲いてももどりわしない
泣いてわかれたあの娘の声を
山のせおとが またきかす

山の瀬音がおしえてくれた
生きて しやわせつかめよと
山百合の花

くぢけずに 生きて しやわせ
つかむまでわ がんばろう
死んでたまるか

旅立ち

只野酔松

たしか、あのころは、楽しいとき、悲しいとき、厭なとき、困ったとき、嬉しいとき、淋しいとき、全て酒でした。毎日毎日、行く着く所は酒でした。頭全部、体全体が酒、酒、酒なのです。この行動は現実からの逃避です。自覚があるかないかは別にして、いつ死んでもいい。死ぬ事なんか恐くないのです。生きるという事に消極的であり、自己否定なのです。自殺行為なのです。あのころ仕事に打ち込む姿は一生懸命に生きているかに見えた、あるいは思えただけなのです。たしかに職場の給与の他、退職するまで囲碁のインストラクターとして、月々、数万からの副収入がありました。この事もいけないことでした。親分肌のところがあつて金私にも良く、いつも俺について来いでした。多くの人達との交流がありました。その交際はいつも酒、酒、酒になっていました。しかし、このような交際は本物の友情ではありません。私自身がいつの日か、借金まみれになり、裸になった時、誰一人として助けてくれる人はありませんでした。それより皆んな私から遠ざかって行きました。だからといってその人達にどうのこうのと思う気持はありません。その意味で私は、広い心を持っていたし、許容力が大きかったです。私は救われました。一番の長所だと

思っています。生まれてこのかた、他人ともめたり、ケンカ等した事はありません。これからの私の生き方の柱になっていく良い点でしょう。私は四月二十六日、ゴールデンウィークの前に入院しました。それから四カ月半、日数にして百三十八泊百三十九日になるわけですが、六月の初めころまでは、私の行動はプログラム通りで、残った時間は全て読書でした。ペンを走らせた時も多くありました。* A Aに出掛ける事もなく、ただひたすらその事に没頭していました。A Aの初めはH会場でした。行ってみてがっかりしました。私の肌合わないばかりか、鳥肌が立ったのです。もう二度とはこの会場には行くまいと思いました。二度目のM教会は、まあまあと思ひ五度、六度と通いました。同じグループのHクラブにも同時に通いました。今でもどうしてなのかわかりません。六月の二十日も過ぎたころと思います。突然の事なのです。ペンを握る私の右手が自然にA Aの申し込み用紙に書き込むのです。それも月火水木金土日と毎日書き込むのです。会場の地図を見つめ、交通機関を調べ、看護士さん、看護婦さんに聞き、A Aに通っている人達に聞き、いつの間にか多くの方達と話しをしている私がいのです。七月二十六日、忘れもしない盆踊りの日、

ただ手と足を動かしただけの踊り、武威国府太鼓の音、終演のナイヤガラの滝。怒濤のごとく流れる滝のように私はA Aに通いました。通い続けました。とにかく暑い中をくる日もくる日もA Aなのです。雨の日も、風の日もA Aなのです。雨といえば不思議でした。通い始めて十日程は梅雨時の事もあって、カサを持って出たのですが、いつの日か私の歩く所、歩いている時、雨が止むのです。一緒に他の会場に行った方は何度か雨に降られています。私にカサは不要になりました。まあ、たまたまそうなったのですが、「ハイヤーパワーだよ」とさりげなく口走っていました。

私の後に入院された方の多くが私より早く退院していく中で、取り残されたかのように見える私ですが、日に日に力が湧いて、力をつけてきています。入院したころの私は屍でした。何の気力もなく、体力もなく、無い無い無いの無いないづくしでした。両肩が痛くバットを振れない事以外は、体調もすこぶる良く、間食なしの病院食のみで、入院してから今日まで、びつたり六十kgを維持しています。睡眠薬も止めませんでした。眠られるようになりました。酒なしで眠れるなんて、紳士のように眠れるなんて思いもよらなかつた事です。モナリザの微笑の人生が幕を開けたのです。

哲学の授業のなかで「人生は何故生きているのか、ではなく、いかに生きるか」だと教わりました。退院と同時に私は大どろぼうになるで

しょう。病院で培った「生きる」ことの喜び、執念、生き涯を盗むでしょう。私は生きられそうです。まだまだ、太陽が雲に見え隠れしていて、はっきりは見透せはしないのですが、明かい日差しが見えてきました。AAに通い続けること、飲まない一日を永く続けることを生涯の日暇として生きて行きます。

入院中の八月四日に誕生日を迎えました。それから五百字前後にまとめて日記を今日まで付けています。いつも三日坊主だったのに、日々棚卸しを続けています。

アルコールは巧妙で、不可解で、強力なものです。助けなしでは手に余るものなのです。飲まない一日を永く続ける知と力を捜し求めて私は退院します。私は旅立ちます。

軽快退院万歳。

*AA自助グループ。アルコホーリクス・アノニマスの略で、経験と力と希望を分かち合っ
て共通する問題を解決し、ほかの人たちもアル
コホリズムから回復するように手助けしたいと
する集まり。共同体。目的は、飲まないで生き
ていくこと、と、ほかのアルコホーリクスも飲ま
ない生き方を達成する手助けをする。

全国でお酒をやめる会

新城秋男

お酒をやめる人にとって、ラジオやテレビに出て来る酒の宣伝は本当に有り難迷惑でなりません。何故かと言うと、お酒をやめる会員のメンバーに関してはものすごく「コク」と言うものとしか言えないのです。

有り難迷惑にしかすぎないので、僕はそう思い悩む次第ですが、お酒を飲める人にとっては有り難い宣伝になるので、くやしくてなりません。やめる側にとっては我慢のしどころだと思っています。

私自身にとっては、お酒を断つ人間としての気力がいっぱいなので悔いは残りませんと言いたいのですが心が乱れる時もあります。

でも男として頑固にならなくてはなりません。「なきなきい、わらいなきい」と歌の文句をはきだしながら、お酒を断ってからもう二カ月はどちます。

まず自分の体の体調をなおしていかなければなりません。そのためには色々な誘惑に悩まされてはいけません。無駄な活力をつかわずに先生が手だすけしてくれたAAアルコホーリクス、アノニマス生活指導の教会にかよって頑張ってください。一から会員の皆様といっしょに頑張るしか有りませんが、それは先生のためでなく、私個人の問題なので一生懸命に頑張るつもりです。

オレ達は世間の人から考えるとホームレス、クズな人間とよく云われますが、同じ人間じゃないか。クソもすれおしっこだってするし病気にもなる。だからお前達に迷惑をかけてはいないし、オレ達もお前達と食事も取ってるし仕事だって負けずになんばつてやってるじゃないか。そしてオレ達はあんたらから何も軽蔑されいやがらせされる筋合い、覚えはないんだ。

さらにあんたらには仕事があるだけ心配はないだろうが、オレ達には仕事がない。こんなくしょうと思いついて、おもてでは笑って裏では泣いて、酒を飲んでうさばらしてきたが、体の病気には勝つてこないのが悔しくてならない。

もう病気になって二十年から三十年ちかくになるが、いっこうに治らない。があんたらから言わせれば、酒におぼれるからと思ってる奴らもいるだろうが、オレ達もそれなりの苦労はしているし、勉強もしている。オレは酒を断ってまだ二―三カ月しかたないが、今に見ていろ、さつぱり酒を断ってみかえしてみせるぜ。

オレ達だって仕事さえ見つかってねるところが有ればもちろん屋根付の寝所があれば、朝、昼間からはアルコールはいらんないさ。恋だつて女の人達とも友達になつてみたいさ。まず酒の病気から治して仕事につくさ。本當さつと立ち直つてみせるから。

オレ達も人間だつて見せてやろうぜ、仲間達も頑張ろうぜ。友よ、いかなる事があつても世間はずがらず、われわれ仲間間で生き抜き、頑張ろうぜ。

「最近思う事」

アル中の・宮

「結局、最後のところはやはり仲間ということなんだろう」と最近深夜に目覚めてしばしば思うことがあります。眠れないままに、あれこれ考えるのですが、やはり、いきつく所は、仲間という一点なのです。

もちろん以前から漠然とした感じはありました。今日までのこの自分を支え、生かしてくれた物は何か。この明日をも知れない時代に信じるものは、はたしてあるのか。次から次へと際限なくおそってくる日常のトラブル、身体の不調、老化のきざし、仕事の上でのさまざまなトラブル、そして不安や焦燥、自己嫌悪とやり場のない怒り、脱力感と諦め、そういったもののごった煮のような毎日の暮らしをよくも何十年も続けてきたものだと感じています。人間というやつはなんとしぶとい存在なのだろうと思います。人は誰でも一生のうちには何度か大きな危機に直面することがあるものです。生死をわかつ重い病気になることがありますが。名誉や地位や仕事までも一挙に失うことだってあります。失業どころか、自己破産を覚悟する場合すらあります。私にもそういう経験は一度ならずありました。ひよっとすると少年時代にいかげんに生きてきた事と無関係ではないかもしれませんが。自分一人何をがんばろうと大きな社会のうねりの前には、ほとんど無力なのだ、体のどこかで感じていようような気がします。だめなものだ、できないことはできない、個人の努力も善意もむくわれない。「いや」

その時のほうが多いのがこの時代。心の底でひそかに思っている。正直者がばかを見る。その言葉を聞いた十代のころ思わずびっくりしたものです。なんだって、これまで正直者がばかを見なかった時代なんて、一度でもあったんだろうか。いまごろ何を言っているのか、と素直におどろいたからです。それをただひねくれた、ゆがんだ考えと切り捨ててしまいたくない気がいまの私の中にあります。世の中には正直者がばかを見ないこともごくまれにあるのです。めったにないことだが絶対にあります。努力がむなしなどとは決して思いません。しかし、それはこの世の中でごくごくまれな、大げさに言えば奇跡のようなこととしてあって、それ以上はないのです。ろこつに言ってしまうえば、正直者はおおむねばかを見ます。努力はほとんどむくわれることはありません。そういう私のものの見方はどこかゆがんでいようように思います。決してノーマルではないでしょう。坂には登りと下りがあります。風にも順風と逆風があります。いま自分がどこに立っているのかが問題です。

いまこそ仲間達という奇妙な力にひよっとするとひとつの活路が見出せるのではないかと私は強く感じています。すべてが自分の責任というわけではない。目に見えない大きな力が私たちを生かし、なかなかやるきさえ起こさせてくれない時もあれば、勇氣とファイトをもたらししてくれるときもある。どうしても信じられなくても、それを待つしかないのです。

二〇〇〇年九月十日

年と共に変る 宗春

この世に生まれて来たからには誰でも否応なく年を取るものです。

どんなに若さや美を持ってても、そうした外見のものは時と共に流れの中ですぐに消え去るものです。

私の人生も、苦勞に負けず、自分の生き方を考え、年を取り、年を重ねてきましたが、人間として自分の輝きが増して来ていると思います。自分の内面にある目に見えないものが日々成長することができ、これが中高年になった大きな望みかも知れない。

生まれてから今まで苦難の道々、歩みであった。決して明るい生き方とは言えない。けれど、これから一つの目的として、無理に若者に競い合うよりも、今まで得られた経験をじっくりと生かし、何よりも苦難を強いられるホームレスの対策を考え、いつまでも若々しく、過去のことにとらわれず、仲間のためにも悠々自適に達することこそが肝心だと、思います。

私もあとどの位生きられるか解らないが、生きていく限り、自分の置かれている立場を大事にし、精一杯直進したいと思っています。

去りし敬老の日に乾杯。



無題

角本輝幸

生者必滅（生あるものは必ず死す）という言葉を実感に感じて生きているのは、オレ達ホームレスではなからうか。

不況だ、リストラ等々と言われている、その最中にいる人達はすぐ自殺に走る。なげかわしいかぎりである。高学歴の人達が多いのが特徴であるが、小さい時からテスト、テストの積みかさねで、人間としての成長をアリがサトウをなめるように少しづつ、少しづつしか生きてこなかった結果であろうか？苦勞という言葉すら知らないのかも知れない。人にやさしさをあたえることも知らないであろう。今の政治家のほとんどがこのなりのはてであると思う。

ホームレスと世間は簡単に言うが、人情味あふれる人達が圧倒的に多い。心情的にやさしい人達だからこそ、お互い助けあっていけるのだと思う。この世界は絶対的に一人では生きていけない。お互い助けあい、食事、寝場所等を分かち合いながら、生きているのだから。

今のこの暑い中、体力もかなり落ちてきている私である。ああ、もうやばいなと感じることも多々ある。目まいで路上に倒れ、急速に血圧が下がって行くのを感じる時はここがオレの死に場所かと頭をかすめる。実際こういうことは多々ある。心臓、高血圧、しかし、何が何でも生きなければと思う。今ここで果てる訳にはいかない。年老いた母親だけは、これ以上心配をかけたくはないから。

2000-2007 TOKYO 冬

路上の仲間の命は仲間の手で守る！
世紀を跨ぐ新宿・池袋
越年・越冬闘争が始まる。

求む！米、毛布、衣類、現金カンパ
秋が終ればいよいよ冬。新宿連絡会では今年も新宿・池袋の仲間の越冬のための取り組みを11月から開始します。そのための物資カンパを是非とも宜しくお願い致します。（送付先は右住所、土日指定でお願いします）

新宿連絡会

東京都台東区日本堤1-25-11山谷労働者福祉会館気付
☎03-3876-7073/090-3818-3450/FAX03-3876-7073
<http://www.jca.apc.org/nojukusha/shinjuku>
E-mail inaba@jca.apc.org

カンパ金送り先

郵便振替口座：00170-1-723682「新宿連絡会」

おはとまち 湊町より

新潟県新潟市の信濃川が海へ注ぐあたり「湊町」から送る よくわからんページ

何が楽しいってアタタ①晴れた夜、②自転車こぎながら、③人、子一人いない道で、④思いつくまま歌を歌う……
 この程至福の時はない、……というのも大袈裟だが、私は歌うのが大好きだ。しかしそう言っていると、じゃ、今度、カラオケに行こうよ、なんていう話になりがちだがそれとは又違って、一人、好きな様に、時にでたため、わからない歌詞は勝手に作詞し、道行く猫にも歌いかけ、人影見えたらハミングでやり過ぎず、なんてのが良い。

幼い頃、父の自転車の後ろに乗せられて、隣の耳鼻科に通っていた。親子二人で川治いの道を行き、又その道を帰ってくる。治療に耐えたごほうび、とでも言うのか、父は大抵、帰り道にある肉屋で編の唐揚げを買ってくれた。アツアツの肉をほお張りながら自転車のゆられ、「子鹿のパンビ」を歌うのがお決まりだった。
 ・こじかのパンビは可愛いいな、お花の匂い、春の朝……
 (こんな可愛い歌を父が教えてくれたという事実には、なんだか不思議な時間を過ごしていたんだなあ、と、改めて思い知らされる。)

歌にも、私にと、この旬があり、季節とともに湧き出てくるメロディがある。昨夜、仕事の帰り道、秋の風を感じてふとロズさんだのは「子鹿のパンビ」。そ、か……アツアツお肉の旨かったあれは秋の出来事だ。たのみなあ……と歌いながら考えていた。体は結構おぼえているものだ。



怪しい選曲

夜道の友達 Song 通年レギュラー

- 「カントーロード」ジョン・バー
- 「スタンドバイミー」バン・モキガ
- 「星の降るおなな夜に」エリカ・マシ
- 「アメイジング・グレイス」
- 「虫になりたい」…南の島のル・シ・オ

吉岡 橋 美香

その他

東京

路上

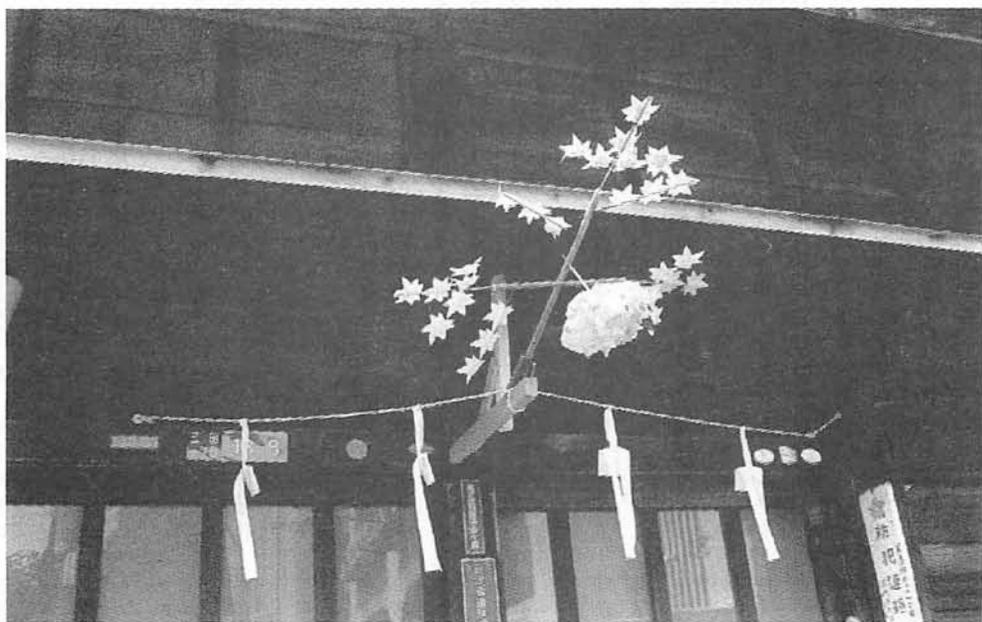
ふらり

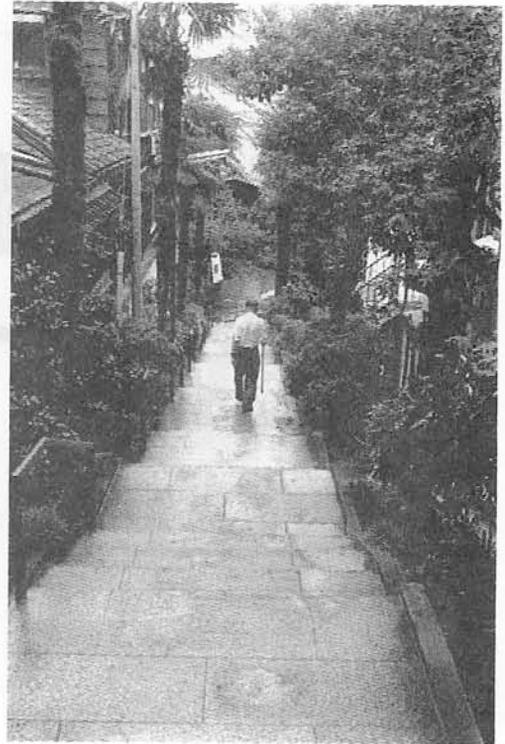
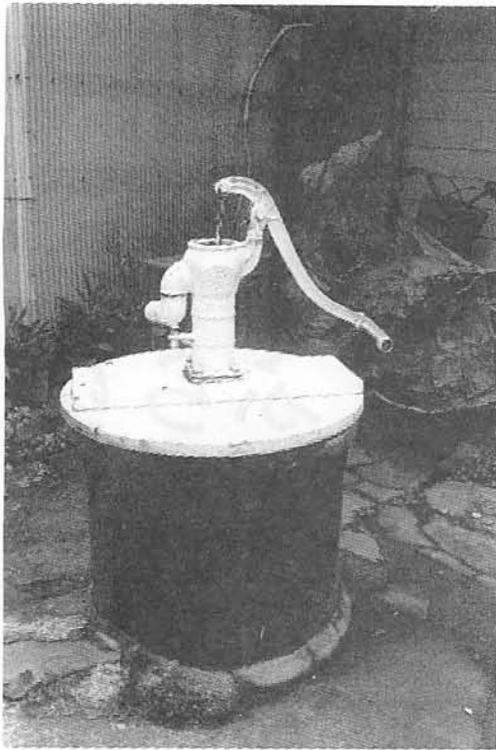
散歩

第9巻

写真・岡田知子
文・笠井和明

「東京タワー」





東京の街は意外と複雑である。その複雑な街並の上下に高速道路網や鉄道網を敷いたから、これまた尚更複雑となった。地下鉄や地下道というものはその際たるもので、何せ外の景色が見えないものだから自分の位置確認も困難となり、見知らぬ土地ではよい大人が迷子になったりもする。道案内を見ても、交番で聞いてみても、それでも尚かつ右往左往する本当に困った都市である。そうでなくとも久しく行かない街の駅前是一年足らずですぐ変わる。今もあちこちで道路工事やビル建設。古い地図など役にも立たず、巨大な迷路園のように日々膨脹する街。彷徨するなというのがもはや通用しない街。

都心部よりも周辺部を好んで歩いて来たふらり散歩であるが、都心部に久し振りに戻って来ようと考え付いた先が、自立鉄塔世界一を誇る東京タワー周辺。世界一高い目印があるだけ、地上を歩いている限りさすがに迷子にだけはならないだろうと思っただけだ。

JR田町駅からタワー目掛けて北上するのも芸がないので京浜道をまらずは西へと向かう。

港区といえ、かの昔は徳川一門菩提寺の芝増上寺、赤穂浪士ゆかりの泉岳寺などを有する武家屋敷街として栄え、明治、大正期には湾岸沿いの芝新網、芝浦、高浜など貧民窟、木賃宿を有する下層ベルトを抱えながらも、高台には皇室、貴族、軍、学閥、資本家の邸宅、施設が武家屋敷の伝統を引継ぎ、また戦後は東京タワーとモノレールを有し観光地としても着目され、かつ、放送業界、芸能業界の隆盛を背景に高級繁華街たる赤坂、六本木を育成し、近年はお台場を埋め立て、汐留を再開発し「新富裕層」用の高級マンションを並べたてる豪華絢爛さで、良く言えば時代の先端を行く街、悪く言えばブルジョワの街として東京ならではの鼻持ちならさを醸し出している街である。

港湾部はともかく、高台ともなるといわゆる「山の手っ子」がうよう

よいる僕らにはちと苦手な土地ではある。

田町駅近辺ともなると港湾で栄えた街の生活感がかつてはいくらかは残っていたものであるが、第一京浜沿いはもはやそれも皆無。高層のビルが建ち並び、近くのタワーもかつての威光すらなく見え隠れする程度の鉄塔。森ビルだ、笹川記念館だと、冷淡なビルが続くただの幹線道路。途中、御田八幡神社などを見学するも、石塔の寄進者の名が赤々と目立つ、何やら下劣な広告を見せられているような神社。

しばらく高輪までぼそぼそと歩き、高台へと意を決して突入。坂を登る。

江戸は「水の都」とも言われたが、他方で「坂の都」でもある。とりわけ山の手地帯には嫌という程坂が多い。平地を歩き慣れた足にはちと辛い。高輪と言っても高級な品川駅前と違い、泉岳寺から三田四丁目にかけては寺院が集中している。小さな寺の裏庭には狭い墓地が点々としており、その側面にマンションなどが建ったりもしている。けれど、坂の多い複雑な地形と、寺院街である事が幸いしたのと思われるが、開発の手から逃れた戦前、戦後の古き木造住宅もこれまたこの地帯には意外と多い。発見である。

高松宮邸前の保安寺へと続く石段の坂を下り、細い路地をくねくね歩くと、古い民家の庭先には井戸があり、路地には小さな花も咲いている。高輪学園を巡るただただのっぺらぼうな路地。初っぱなからもはや道順すら分からず、迷子状態となってしまうが、路地に導かれるように迷うのは、それはそれで心地良い。坂の下には何があるのか。道の曲角には何があるのか。生活のための坂であり道でありさえすれば、目印などなくても、どこことなく安心出来る。



そして、着いた先が泉岳寺。年末といえ「第九」か「赤穂浪士」。もはや定番文化にまでもなった時代劇のスーパースター四十七義士が眠る、いわば観光名所中の名所であるこの寺も、何故だか寺前は数件の土産物屋があるだけで、休日なれど人影もひっそり。義にあまり篤くない東京ではそのギャップが激しすぎて、もはや観光地にもならないのだろうか。

伊皿子坂を再び登り、起伏の具合がおもしろい道往寺の駐車場を進んで行くと、日の当たらぬ高台に小さな墓地があり、またその奥の目につかぬプレハブ倉庫の裏には卒塔婆が無造作に立て掛けてある。誰の墓地のものかは知らないが「効率化」を優先させる東京ならではの死後の光景。

魚藍坂を下り、和洋折衷、とてつもない古さと新しさを兼ね備える三田の寺院街を巡り歩く。けれど東京タワーはビルの谷間に沈んでしまったのかどこにも見えない。これじゃ目印にもなりやしない。

桜田通りに出、慶応義塾の校舎の脇を通り、綱坂を登れば、左手にブルジョワの総本山か、三井倶楽部。やれやれ付近を走っているのは、外車だらけだ。昭和初期に建てられた東京簡易保険局の威圧感あふれる大構造物を見上げ、神明坂を下れば、天祖神社で秋まつり。こんな所で秋まつりとは目を疑ったが、やはりこんな所でも人々の生活は成り立っている。押しつぶされそうな庶民でも、地域を愛でる庶民らしさは細々と保っている。お神楽の音楽に地域の子供が集まり、子供御輿を丸い瞳で見上げていた。

高速下の古川の近くまで来ると、ビルの谷間からようやく東京タワーが姿を覗かせる。橋を渡った古川沿いの小さな公園には、ダンボールハウスが三件。空き缶集めの生業に精を出しているのか、大きなゴミ袋にははちきれんばかりのアルミ缶。もう芝公園も目

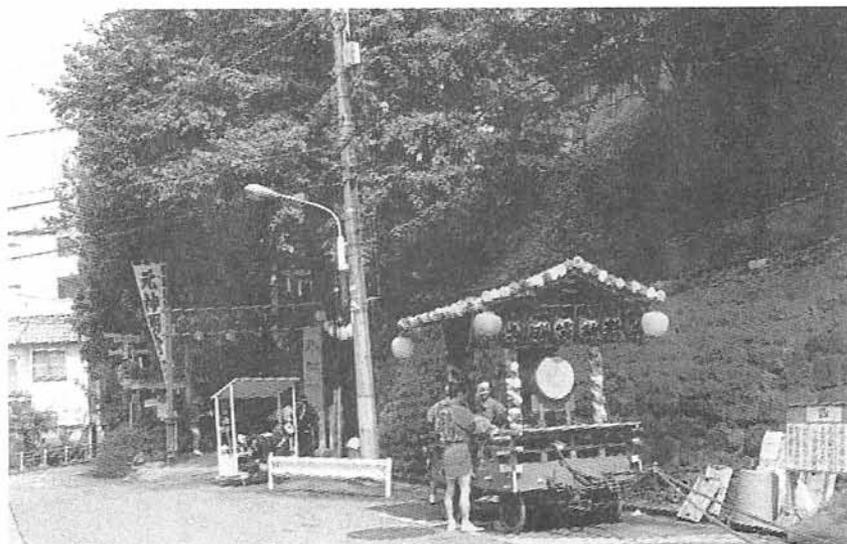
と鼻の先である。

東麻布の商店街は「かかし祭り」のデコレーションがあちこち。なのに人影はまばら、小中学校の統廃合が続くのもここいらの地。ドーナツ化現象などという言葉の実感は、こういう休日の日の都心の商店街を見れば良く分かる。生活人口が減り、活気が薄れ、錆びれた商店街の向こうには、世界一の東京タワー。それを毎日眺めながら、野宿のおっちゃんらが細々と空き缶集め。普通に暮らして行くという事は一体どういう事なのだろうか？

土器坂を横断する歩道橋を渡り、丘を登るとすぐに東京タワーを支える大きな足元が見える。

しかし、高度経済成長のシンボルとも言われたこのタワーがすっかり注目されなくなったのも時代の流れであろうか。自立鉄塔世界一の高さ（三三三メートル）と言われても大展望台は百五十メ





ートル、特別展望台は二百五十メートルからしか眺望できず、しかもゴチャゴチャした東京を今更、俯瞰したとしてもさしたる美しさは期待出来ない。展望室の高さで言えば横浜ランドマークに抜かれ、新宿都庁の展望室や池袋サンシャインでも二百メートル級の高さで東京を眺められるようになりと、わざわざ交通の便の悪い芝まで来て、タワーに登る必然性も薄れて来た。「ろう人形館」も最近の子供にはそっぽを向かれ、アミューズメント施設としてはどこかもの足りない。よほどテナントが入らないのか、タワービルの四階には「政府広報展示室」なんていうスペースやら昼寝が出来そうな大きな休憩場所まで設けられている。外観の美しさも、回りに無秩序に建つ高層ビルやら霊友会のおかしな格好の建物などで大無しだし、もはや、過ぎ去った時代のシンボルにすぎぬ老兵になってしまったようだ（もちろん、テレビ塔としては今でも立派に現役なのであるが）。

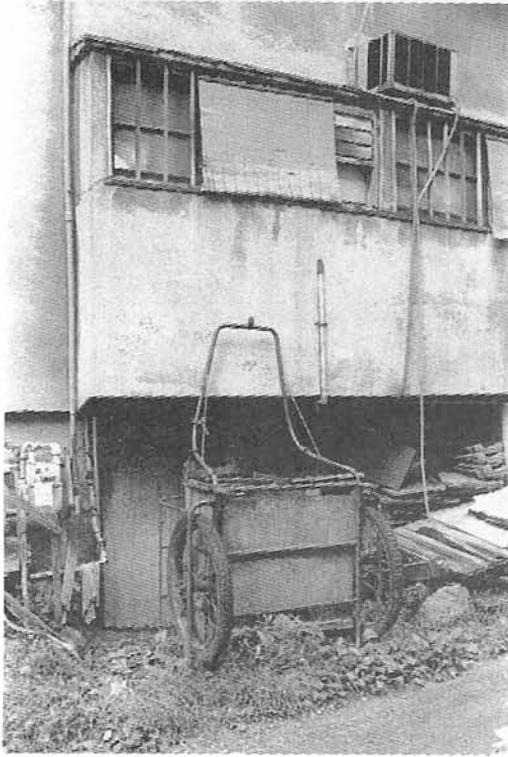
東京タワーの四本の足を軸に広がる駐車場にはまばらな観光バス。タワービルの土産屋はレトロな地方都市の雰囲気。家族連れにまぎって、近くのサラリーマンが名店街で食事をとっていた。



東京タワーを背にして、飯倉交差点からロシア大使館の横を曲り、狸穴坂を降りる。少しだけ残る古びた家々や空き地を見学しながら永坂を下り、麻布十番に入る。すると突然の雷雨。夏の終りを告げる気候は不安定であり名残惜しい。それでいてすつと秋へと移り行くのだから、何とも罪深い。店に飛び入りコーヒーを飲みながら気紛れな雨の止むのをじっと待つ。

麻布十番は唯一と言っていい程、山の手の商店街で活気がある商店街。アメリカ公使の宿泊所があった場所だけあり、近隣に住む外国人も身近に買物に来れる場所。小じんまりした店々のバラエティによる日常の縁日状態が、商店街という空間の最も魅力ある所。少々お高い雰囲気のあるこの商店街も、歴史がなせる業かしっかりと地に足がついており、人の流れもとぎれない。

雨のせいでもひととき涼しくなった一本松坂、狸坂界隈の町並を再び登ったり下りたり。またもや彷徨状態。そもその地形が複雑な上に、道もまた細くなったり、太くなったりで地図も何も役に立たない。おまけに街並も古くなったと思ったら、とびきり新しくなったりと歩いていてクラクラしてしまう。後ろを振り向いても東京タワーはどこ行った？見え



たり見えなくなったり。狸や狐に化かされる昔話になるほど多い地である筈と、歩いて見て初めて分かった

箕公園の脇からようやく外苑西通りに出ると、沿道には近未来的な意匠を凝した建物がいくつも聳え建つ。建築家のお遊びとしか思えない建物がやけに多いのもここいらから六本木通りまでのバブルの爪痕。それを「お洒落」と言い、かつての東京タワーなどには目もくれないのが、東京人の悪いところ。新しいものが常に良いと一体誰がそんな「信仰」を植え付けたのであろうか。

西麻布の交差点を北上すると緑豊かな青山霊園。墓地ながらも窒息しそうな都心の雰囲気をもっと和らげてくれる。公営の霊園だけあって、歴代の首相から市井の人々まで神仏問わずに平等に吊っている。さながら地獄から天国に登ってきたようだ。

街それ自体が迷宮のようになっていて東京では、一度そこに足を踏み入れたら彷徨い歩く事しか出来なくなる。そこには人々の歴史があり過ぎ、人々の生と死があり過ぎ、発展や効率や開発があり過ぎ、もはや何をどう整理したらよいのかすら見つかからない。普通に暮らすという事すらも、何を比較に普通と云うのかという基準すら失い、東京タワーという大鉄塔さえも高層ビルの中に埋もれ、目印も失い、坂を登ったり下ったりするしかない人生。この街自身が何か今の世の象徴のようにも思える。山の手の忌み嫌われる程の気高さすらもいまはどこかへと忘れさり、土着性すら投げ売って世俗に徹頭徹尾迎合しつくした末、街そのものも彷徨い始めた。近年の東京の醜さは、雑然たる複雑さが融合され得ず、どこまでも放置されている醜さである。限度という言葉はもう死語のようだ。

世俗にどっぷりと漬かるのも悪くはない。けれど、ビジョンや夢がない混沌の現実からは何が生まれよう。だから、東京タワーは凜としていなければならぬ。宇宙を射抜くが如き視線を持ち、そこへ登れない人々のためにも、墜ちて行く人々のためにも夢を語らなければならぬ。空への夢を語り、天体への夢を語り、たとえそれが果たせぬ夢でも、凜としていなければならぬ。

秋だからだろうか、そんな感傷的な思いにもなる。

天上の国のような青山霊園を散策し、陸橋を渡るとそこは乃木坂。とにかくこの迷宮には坂が多いのである。

(了)





食べ物も着る物もはく物も手に入らないおれたちに何人かのボランティアの人が親切に何かと物をはこんできてくれる。それでおれたちは今日まですこしはこぎれいなみなりもして、だからあまりきたなくてみんなにもさらわれたりもしないでいられる。食べるものも着る物もなかったらおれたちはばかにされプライドがいためつけられていただろう。

ものや金がある人はよけいな物を与えられたらプライドがさびつくだろうけど、困っているものはものも親切もすなおにうれしいんだ。おれは夢だけじゃ生きていけない。まして仕事したくてもない、金は入ってこない、国は助けてはくれない。ぜんいの押し売りでもいい。物が手に入らなければ死をえらぶやつだっていっぱいいると思う。食べなくとも、死にそうでもプライドにこだわるやつもいるにはちがいないが(あんたみたいに)、そうでないおれたちみたいに物をくれる親切な人に助けられて生きのびているものには、あんたの書いてあることはちがっている。こんなことで誰も物も親切も助けも与えなくなったら死んでしまうおれたちがいることをわかってもらいたくて書いた。

どうぞここに居るときは人の役に立つまえに安心がほしいことを、あんたはわかっているでゆっているのはおれたちはこまることをいいたいのだ。人なみによゆうが出来るまではたすけてほしい。心だけでは腹いっぱいにはならないのだから。与えてくれる人はみんないい人でプライドのようなものも与えていってくれる。(おわり)

渋谷区在住Kさんより編集部への手紙

先日朝日新聞8月13日に記載された「路上生活から絵の世界へ」の作品展を見にいった者です。その時頂いたパンフレットと一緒に露宿第7号を頂いてきました。ホームレスの人たちの悲喜こもごもが心にしみわたってきました。私もつい最近渋谷の自宅からそう離れていない所に住んでいるホームレスの人達のボランティア的な事を友人数人と(主に主婦)思い切って始めたところなんです。何をしても良いのか判らずとにかく何かをしなればの思いで飛び込んでいます。文集にありました支援者に告ぐに目を通しちょっと寂しい気持ちになり私の思いを綴りました。支援者は確かに相手にとってプラスになることで意味を持つのだと思います。でも支援する側のも全てがプロではありません。相手を思い自分なりに精一杯の自分の出来る事をしていきます。野宿をしている人皆がすぐに人の役に立つことやプライドを持つことで満足するのだろうか。そう感じる前に最低限の衣食の確保などの安心感も必要なのではないのか。当人ではないので判りませんが。恩田さんは当人なのですかそれとも支援者なののでしょうか。いま私や友人の様に自分なりに勇気を持ってボランティアしている人やこれからしようとしている人でもこの文章を読んでやる気がなくなる人が出るだろうなと悲しくなりました。これは支援者いじめと締め出しになるような気がします。こんな所にも締め出し精神があるのだと思うと絶望的です。私の行っていることは押し売りでサギ!…。もし貴方が支援者なら『輩』『アホかこいつ』こんな言葉が人を知らずに傷つけていることを知ってほしい。支援しようとしている者の意欲も奪い取っていることも。

Kさん、田中さんへ(アイウエオ順)

お手紙ありがとう。お二人の手紙に、いろいろ考えさせられたので、私が露宿7号「支援者に告ぐ」を書いたきつかけを童話にしたから、もしよかつたら読んでね。

昔あるところに、人のために生きたいと考える男がいました。いつでもどこでも、自分の幸せより他人の幸せを願っていました。

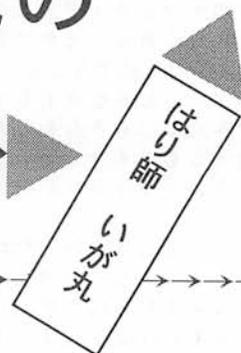
そんなある日。貧しい身なりをした老人が、男の前を通り過ぎました。「あの、あなたは家や食べ物に困っているのではありませんか?もしそうなら、私の家にいらつしやい」こう男が話しかけると、老人は大喜びで後について行きました。その日から、来る日も来る日も老人に食べ物を与え、家で寝てもらおう。老人はとてもありがたく思いましたが、毎日頭を下げなければならぬので、疲れてきました。男も、毎日食べて寝てばかりいる老人に、少しづつ嫌気がさしてきました。

そんなある日。「ここに泊めてもらえませんか」と、都合から旅人がやってきました。人のために生きたいと考える男が、泊めない訳がありません。さっそく旅人のために、寝床が作られました。旅人が腰をおろすと、隣の部屋にいた老人が男のいないのを確かめながら近づき、こう言いました。「俺は、たまらない。あの男には本当に世話になっている。毎日食べるのも寝るのも困らない。感謝している。でも、こんな毎日が続くとは、どんどん自分がみじめになっていくんだ。なんであいつに、毎日頭を下げなきゃならないんだ。あいつは、全然俺の気持ちをわかってくれない。あいつは、人の下にいたことがないんだ。仕事さえあれば、ここを早く出られるのに。早く出て、あいつから逃げたい。何も知らない旅人に、自分の気持ちをさらけ出してすっきりしたのか、老人はすーっと自分の部屋に戻っていきました。翌日、老人が起きると男はいっつものように朝食の用意をしてくれました。それを見た老人は、べっこり頭を下げこう言いました。「ありがたうございます。感謝しています。」

恩田

▶ はり師いが丸の

肝心かなめ



先回の中央公園での鍼灸治療の翌朝。寢床から起きあがろうとした私は小さな悲鳴をあげた。腰が立たないのだ。広義でいうところの「ギックリ腰」というやつである。

原因はわかっている。前日の治療の姿勢だ。地べたにダンボールを敷いての低い作業点での治療はただでさえ腰に悪い。悪いのはわかっている。だからこそ尚更、その上無理な姿勢をとったりしてはいけないのだ。にもかかわらず、この日は忙しくて注意を怠った。治療をしながら、時折走る腰の痛みに、「こりゃやばい」と何度もひきつった。そして翌朝。漸く這い上がり、顔を洗おうとした私は、中腰になれなくて手をついた。腰痛の患者さんの顔が走馬燈のように頭の中を駆けめぐる。ある学説によると、急性腰痛（いわゆるギックリ腰）になった人のうち、2ヶ月後までには90%の人が、1年後までには99%の人が、症状が軽くなるという。しかし、2年後には60%の人が腰痛を再発している。日常生活や仕事の中で、重い物を持ったときや、疲れがたまり、筋肉のバランスを崩したりしたときに、背骨や椎間板には小さい傷がつき、これが痛みを感じるモトとなる。この傷は治るのだが、一度傷ついたところは再び傷ができやすく、傷を繰り返している背骨や椎間板は、だんだん変形していくのです。

ということで、そういった傷を繰り返させないために、腰を痛めることはできるだけしない。痛みを感じたら、我慢して繰り返さないことが大事。といっても、重い物を持ち上げる仕事、中腰を余儀なくされる仕事は少なくありません。その時は、なんとかして、その作業する位置を高めに変えられないか、腰を痛めない姿勢で作業ができないか、仕事仲間と知恵を絞ってみてください。そして、作業中、時々バンザイをして身体を伸ばしてみてください。

身を持って言います。腰はまさしく身体の要！まずは何より予防です。

ちなみにその後のいが丸がどうなったかという、冷静になり、どの姿勢が痛むか、どこが最も痛むかを確認していくと、椎間関節という背骨のつなぎ目が問題となっている腰痛であろうということがわかる。これは幸いうまく当たればハリで一発で治る類の腰痛であった。ひとり後ろ手で腰にハリを打ち（これは結構切ないものがある）、ズキズキという腰の疼きと共に入眠。翌朝には嬉々として起きあがることができました。（手前味噌）

次号（10号）から読者のページを新設します。

「露宿」愛読者の皆さんの熱烈なる御期待に応え、全国の読者からの御意見、御感想等を掲載する新たなページを次号から設置することとなりました。激励、批判、質問なんでも構いません。「露宿」に対する思いなどををろじゅく編集室「読者のページ係」までお送り下さい（ペンネーム可）。各地の同人誌などの紹介などもして頂けたら幸いです。狭い殻に閉じこもらず、「露宿」は全国の人々との親しき交流を続けたいと願っています。

また、投稿作品も路上生活者に限らず、路上に思いを寄せる全ての人々から募集しています。路上生活者の方々も、また、そうでない人々も共に励ましあえるような雑誌を目指していきたいと考えています。

10号は12月25日発行予定です。

「露宿」10号は12月25日発行予定、原稿締め切りは11月30日必着でお願いいたします。この間、続々と新たな路上の表現者が登場しています。旨い下手など関係なし。作品の形式も問わず。生きている証を「露宿」に刻みつけよう！

[露宿定期購読の御案内]

路上文芸総合雑誌「露宿」はもちろん全国の本屋では売っていません。毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。

定期購読 8回分 5000円（郵送料込み）

定期購読 4回分 2500円（郵送料込み）

一回ごとの購入でも大歓迎。一冊送料込みで660円となります。その場合は御面倒でも継続購読を連絡して下さい。

申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

編集後記

秋の夜に 月輝きて 我照らす

人恋しさも やわらぐ道さ！

夜空に浮かぶ青白い月は、下界を見守るかのごとく淡々と光を放ちます。あるいは嘲笑っているのか？いずれにせよ人恋しい季節となりました。秋の夜長は露宿を手に取り、人々の情熱、思いに心温めてみては？さて、私もそうするかな。おっとその前に、腰痛持ちの私としては、腰を温めねばならないのであった。それともはり師い丸様にお頼み申すか？なんともかんとこんな秋。では、また！（お）

露宿ペン倶楽部短信

今号は山谷執筆陣が大健闘。池袋、新宿、渋谷も負けずに頑張ろう！

前号でお知らせした五林さんは無事退院。田代さんも順調に回復しております。

6号から常連で投稿してくれているE子さんの連れ合いが9月下旬路上で急死…。仕事がようやく決まり、ささやかな生活を二人で築こうと話していた矢先でした。言葉が出ません。御冥福をお祈り致します。

露宿バックナンバー

まだまだ発売中！

露宿バックナンバー創刊号、3号の在庫が残り少なくなりました（2号、4号は売り切れです）。限定1000部発行の印刷物ですのでお求めはお早めに。5号、6号、7号、8号の在庫はまだあります。お求めはろじゅく編集室までご一報を。2冊以上は送料無料、5冊セット2000円、6冊セット2500円で販売しております（尚、在庫が切れた場合はご容赦下さい）。

Rojuku

定期購読大募集

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくられました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

購読費・スポンサー費送り先
郵便振替口座
00160-6-190947
「ろじゅく編集室」

「ろじゅく」

♪露宿を置いて下さるお店・スペースを探しています。お気持ちのある方はぜひご連絡下さい。まとめ買いの場合は、とてもお安くなります。

♪露宿では広告を募集しています。又、投稿お便り、大歓迎です。下記住所のほか、「ろじゅく編集室専用ファックス」03-3981-6746がございます。「露宿」の注文・原稿送付・広告申込・お便り等、何にでもお気軽にご利用下さい。

露宿 ROJUKUはココで買えます。

◆模索舎 東京都新宿区2-4-9 TEL/FAX 03-3352-3557 ◆TACO ché 東京都中野区中野5-5-2-15 中野ブロードウェイ 3階 TEL 03-5343-3010 FAX 03-5343-4010 ◆スペースかぼす 東京都新宿区大京町3新大京マンション304号 TEL 03-5367-5666 ◆山谷労働者福祉会館 東京都台東区日本堤1-25-11 TEL 03-3876-7073 ◆新宿中央公園ポケットパーク (毎日曜午後6時から8時まで) TEL 090-3818-3450 ◆石手寺 愛媛県松山市石手2-9-21 TEL 089-977-0870 ◆城西教会 東京都渋谷区西原1-19-3 TEL 03-3466-0445

路上文芸総合雑誌「露宿 (ROJUKU)」第9号 2000年10月25日発行 (隔月刊)
主宰・笠井和明 編集/発行・ろじゅく編集室 〒170-0014 東京都豊島区池袋1-14-5-13
TEL/FAX 03-3981-6746/090-3818-3450 (笠井)
Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/
郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」
販売協力・新宿連絡会、露宿ペン倶楽部 印刷・株式会社ラジオグラフィー